

自然体験活動の実践と人々との連携や繋がり

宮野 純次

はじめに

社会の変化の中で子どもたちの自然体験の機会が減少し、学校内外を通じて、子どもたちの多様な体験活動の充実を図ることが求められている。また、豊かな環境を維持し、持続可能な発展ができる社会を構築するために、学校、家庭、地域が連携し体験活動を通じて環境保全に取り組む環境教育も求められている。

しかし、2020（令和2）年度は、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の感染拡大により、人々の活動自体が制限された。心配や恐れ、不安が生じる中で屋外での活動も制限され、自然体験活動は大幅に減少した。

様々な人々と関わり、地域の人材とも連携しながら、自然体験活動を実施していくことのすばらしさや大切さを、活動が制限されたコロナ禍において痛感することとなった。活動がほとんどできなかった2020（令和2）年度は、これまで筆者が実践してきた自然体験活動における地域の人材との連携や関連する全国の人々との繋がりを踏まえながら自然体験活動の実践について考察する。

1. ジュニア自然大学「こどもゆめくらぶ」における活動

ジュニア自然大学「こどもゆめくらぶ」は、「学校の土曜日並びに地域での総合学習に対応する事業として、自然とのふれあいと協働作業を通じ、環境学習と子どもたちの『生きる力』を養う」という目的で、2002（平成14）年4月に開講された。筆者も開講初年度からこの「こどもゆめくらぶ」での活動にかかわっている。

大阪府豊中市の服部緑地公園の一角にある「日本民家集落博物館」内の自然や畑、茅葺き（かやぶき）の民家が、「こどもゆめくらぶ」の主な活動場所で

ある。完全学校週5日制が始まる年にスタートした小学生を対象にしたこの取り組みは、第1・3土曜日（全15回）に開講された。さらに、2004（平成16）年度からは、修了した子どもたちを対象にしたセカンドコースも第2・4土曜日（全15回）に開講されるようになった。

NPO法人シニア自然大学の講座を修了した自然活動リーダーを中心として、教員や保育士を目指す本学学生も参加し連携しながら、子どもたちのための自然体験活動が実践されてきた。活動開始から14年目の2015（平成27）年度からは、シニアの自然活動リーダー不足から、セカンドコースは休止され、第1・3土曜日の本科コースだけの実施になっている。

開講から19年目になる2020（令和2）年も、4月からの活動へ向けて着々と準備が進められていた。その一方で、新型コロナウイルス感染症が全国的かつ急速にまん延しつつあった。地域における感染状況を考慮しながら、開講式は例年より遅い4月下旬に計画された。

しかし、4月7日に大阪を含めた7都府県に緊急事態宣言が出され、4月16日にはその対象が全国へと拡大された。活動場所である民家集落博物館も休館になったことで館内に入ることができず、作物の手入れや畑の整備ができない状況であった。さらに、当初から宣言の対象とされた7都府県に、6道府県を加えた13の都道府県は、特に重点的に感染拡大防止の取り組みを進める「特定警戒都道府県」と位置づけられた。5月21日には大阪・京都・兵庫の3府県における緊急事態宣言の解除が決定されたが、学校での教育活動は地域の感染状況に応じ感染予防に配慮して、段階的に再開されるような状況であった。

コロナ禍が収束しない状況を踏まえ、子どもたち・保護者・リーダーや地域の人々の健康・安全を第1に考えて、第19期の「こどもゆめくらぶ」は中止とする苦渋の決断になった。

これまでの活動実践を踏まえて、第19期の「こどもゆめくらぶ」も人と自然との繋がり、人と人との繋がりを強く意識した内容で構成されていた。以下、計画されていた開講式の内容を記す。

開講式は、日本民家集落博物館の歌舞伎舞台前広場で、4班編成の子どもたち、その後ろに保護者、そして両脇をリーダーたちで囲みながら、形式ばらずなごやかに、歌声から幕を開く。開講のはじめのことばの後には、交互に同じ歌詞を「こだま（エコー）」のように歌い合うエコーソングの形式になっている。「大きな歌」をみんなで一緒に歌う予定であった。

隣接する元石臼広場前に移動後は、班ごとにアイスブレイキング、自己紹介、名札作り、班の旗作り、といった子どもたちとリーダーたちによる活動である。また、様々な体験をする子どもたちとのコミュニケーションがより深まるように、保護者にも同時進行で次のような内容が計画されていた。まずジュニア自然大学のねらいと概要についてお話し、次に歌舞伎舞台前広場から畑へ移動する際に、ネイチャーゲームのフィールドビンゴを一緒に実体験することで自然とのかかわり方についての認識も深めてもらう。そして第2回目から子どもたちが活動する畑を前に、畑と野菜作り・畑の役割・たい肥作りについてリーダーから具体的に説明される予定であった。

開講式のある第1回目のお昼は保護者も、一緒に来ている兄弟姉妹も各班の中へ合流し、みんなで輪になって一緒に食べる。昼食後は、班ごとに、竹林でのたけのこ観察や畑前での耕作や野菜作りについてのお話が計画されていた。

午後は、第2回目から毎回お昼の食事でする味噌汁用の My お椀と My お箸を作る竹工作である。その際、安全でけがのないように、のこぎりや小刀の正しい道具の使い方について、実演しながら子どもたちに指導する工夫がなされていた。道具を使って作る楽しさが十分に体験できるように、また子どもたちだけでなく保護者も参加して一緒に体験する竹工作の実践である。活動の後には、使用したシート、道具や切りくずの始末など、後片付けをするまでが大切にされる。最後に、一日の活動を振り返り、体験したことをみんなで分かち合う時間など、班ごとの活動が計画されていた。

毎回のプログラムにおいて、子どもたちは午前中に畑を耕し、野菜を育て、作物の成長や周囲の自然を観察する。昼には、採れたての野菜が入った味噌汁

を、自分で作った竹のお箸やお椀で味わう。午後には、自然文化（昔話、紙芝居、自然工作、自然との触れ合いゲームなど）を実体験する。また、科学教室（装置を使って実験や顕微鏡での観察など）も行う。

これまで実践してきた2回目以降の午前中の活動内容を具体的に記す。初めての畑（畑と道具のお話、夏野菜の植え付け）、サツマイモやトウモロコシの植え付け（農具を使った耕作、夏野菜の観察と世話）、タマネギの収穫と保管（紐結びと支柱たて）、ジャガイモの話と収穫（キュウリの初収穫）、夏野菜の生育と土・水・光・肥料の役割（夏野菜の収穫と試食）、夏野菜の収穫と畑作業1（野菜畑の観察とスケッチ）、夏野菜の収穫と畑作業2（夏野菜の観察、収穫、試食、夏祭りの計画）、楽しいミニ夏祭り（夏野菜をたっぷり収穫し味わう、畑の耕作と整備）、ダイコン・タマネギの種蒔き（ダイコンの話）、バス遠足（泉原の里山体験、日帰り）、ダイコンの間引き・土寄せ（秋野菜の話）、秋の自然観察（都市緑化植物園で）、サツマイモの収穫とソラマメ・エンドウ豆の種蒔き（サツマイモの不思議）、里芋・落花生の収穫とタマネギの植え付け（野菜の不思議とつくり）、民家思い出めぐり・お餅つき（道具整理、畑に感謝・大鍋作り）。

同様に、午後の活動内容を記す。野菜の不思議のお話、民家（昔のおうち）めぐりとスケッチ、虫眼鏡を使ってみよう（自然観察の初めの一步）、初夏の自然観察、民家で昔の暮らしミニ体験、水鉄砲づくり、虫の観察、おやつ作りと出店大会、こども環境会議、里山探検隊、（綿や蚕の繭から）糸つむぎ、自然の色探し・ネイチャーゲーム体験（カモフラージュ）・笹船流し、コンニャクイモからこんにゃく作り、生き物は冬支度・手作り織物体験、修了式・ダイコンの収穫（持ち帰り）。

4月に始まり12月までの全15、16回の活動において、子どもたち、シニア世代のリーダー、学生サブ・リーダーといった多世代が交流する中で、驚きや発見が共有され、相互に影響を与え合う自然体験活動が実践されてきた。工作が得意、野菜作りが得意、身近な自然観察が得意、料理やおやつ作りが得意、など多様な人材が関わることで、子どもたちが体験する内容が幅広く豊かになっ

ている。このように地域の人材と連携することで、多世代が交流する継続的な活動へと繋がっている。コロナ禍の収束後には、この連携した活動を再開していきたい。

2. 「京都かも川ネイチャーゲームの会」における活動

自然体験プログラムの1つに、いろいろなゲームを通して自然の不思議や仕組みを学び、自然と自分が一体であることに気づくことを目的としたネイチャーゲームがある。公益法人制度改革により、2013（平成25）年4月から社団法人日本ネイチャーゲーム協会は、「公益社団法人日本シェアリングネイチャー協会」に名称変更している。当協会は、ジョセフ・コーネル（Joseph B. Cornell）氏の著作“Sharing Nature With Children”を1986（昭和61）年に日本で出版する際に「ネイチャーゲーム1」と訳して紹介したことが活動の原点になっている。ネイチャーゲームアクティビティは、現在170種類余りあるが、自然に関する特別な知識がなくても、豊かな自然の持つさまざまな表情を楽しめる。自然の中だけでなく、町中の公園や学校の校庭でも実践できる。本学では、2001（平成13）年からスタートしたネイチャーゲーム課程認定校制度を活用して、2003（平成15）年度から課程認定校としてネイチャーゲームリーダー養成講座を開催し、毎年、何名もの学生が公認ネイチャーゲームリーダーの資格を取得している。

公益社団法人日本シェアリングネイチャー協会には、日本国内の各都道府県の地域組織として、「都道府県シェアリングネイチャー協会」があり、市町村単位では、ネイチャーゲーム指導員（リーダー）の有志による地域の会がある。本学がある京都市内には、京都かも川ネイチャーゲームの会があり、これまで継続的に学生と一緒に参加し活動してきている。

活動場所としては、左京区岩倉にある岩倉農場とその近辺、および京都御苑である。年に4回ほど、季節ごとに身近な自然を体感する「ネイチャーゲームのつどい」が開催される。天候などにより、年によって開催時期は若干異な

てくる。これまで、「春のつどい」「初夏のつどい」「夏のつどい」「初秋のつどい」「初冬のつどい」「早春のつどい」に参加し、里山の自然体験とネイチャーゲームを実践してきた。2018年8月に岩倉農場が閉鎖されるまでは、ネイチャーゲーム体験に加えて、山野草の観察・採集、天ぷら調理・試食、田植えに向けた籾・種まき（プラグ苗づくり）、田植え体験、まきの葉（サルトリイバラ）団子づくり、稲刈り体験、脱穀体験、農場で収穫したもち米を使ったおはぎづくり、野点体験、生け花体験、餅つき体験、わら飾りづくりなど、農場やその周辺の自然を活かした多様な活動を行っていた。

2020（令和2）年度も活動開始に向けて準備が進められてきていたが、コロナ禍が収束しない状況を踏まえ、計画されていた活動はすべて中止となった。計画されていた内容やこれまでの活動実践を踏まえて、地域の人材との連携について考えてみたい。

2020年度は当初、季節のつどいとして「初夏のつどい」「夏のつどい」「初秋のつどい」を京都御苑において、そしてネイチャーゲームと里山ハイキングがテーマの「初冬のつどい」では京都市内の東山を散策する自然体験が計画されていた。詳細は決まり次第、日本シェアリングネイチャー協会ホームページの「イベント情報」に掲載される予定であった。一般参加者としてネイチャーゲームを楽しみたい子どもたちや保護者だけでなく、ネイチャーゲームのリーダー資格を活かす場を求めている人が指導補助体験をする参加も可能である。ネイチャーゲームでは、①自然や環境への理解の深まり、②五感によるさまざまな自然体験、③自然の美しさや面白さの発見、④他者への思いやりや生命を大切にすする心の育成、⑤感受性の高まり、などが期待されている。子どもたちと保護者、地域の人材やネイチャーゲームリーダー、学生と一緒に交流することで、より体験が深まり、豊かなわかちあいへと繋がる。コロナ禍の収束後には、京都かも川ネイチャーゲームの会における連携活動を再開していきたい。

3. 全国ネイチャーゲーム研究大会における活動

ネイチャーゲームの大きなイベントの1つに、全国ネイチャーゲーム研究大会がある。全国の都道府県シェアリングネイチャー協会が持ち回りをしながら、年1回、5～6月頃に2泊3日で開催している大会である。地元のネイチャーゲームの仲間たちが、大会テーマの設定から受け入れ準備、開催地の自然や文化、人材を生かしたワークショップなど、1年以上の時間をかけて準備する。しかし、新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、2020年度の研究大会は中止となった。研究大会に向けて準備・計画されていた内容は、日本シェアリングネイチャー協会のホームページ上で公開（全国ネイチャーゲーム研究大会 in 秋田 2020「ブナの森に抱かれて～ココロもカラダも“森”呼吸～」実施計画）された。また、翌年にオンラインで開催された「全国ネイチャーゲーム研究大会 from 神奈川」において、「秋田 TIME 2020」の枠が設けられ、秋田大会テーマである「ブナの森に抱かれて」がオンラインで映像と共にそのエッセンスが紹介された。以下、計画されていた秋田大会2020における全国大会の活動や取り組み内容を踏まえて、関連する全国の人々との繋がり、人と自然との関係について考えてみたい。

幻の秋田大会の映像とエッセンスは、会場の秋田県仙北市乳頭温泉郷のブナの森への案内からスタートしている。小鳥やハルゼミの音が聞こえるブナの森で耳を澄まし、ゆっくりと心の中で数を数え、大きく息を吐いたり吸ったりすることでリラックス感を味わう。次の場面では、ブナの若い芽が、豪雪を乗り越え一斉に芽を出している。さらに、たくさんの木々が枝葉を高く伸ばしている。小鳥たちのさえずりを聴きながら、ゆったりと自分のペースで呼吸を繰り返すことで、自然との一体感が味わえるような構成になっていた。

田沢湖スキー場グレンデが開会式会場とされ、ワークショップ説明会の後には、地元の仙北市出身の小松ひとみさんによる基調講演「自然からの贈り物」が計画されていた。小松さん撮影の美しい写真を大型スクリーンで紹介しながら、自然との向き合い方について講演される予定であった。さらに、夕方のウ

エルカムパーティでは、地元の踊り子さんたちやなまはげの登場、そしてその後のフリープログラム・交流会では、例えば、屋上のウッドデッキに寝っ転がって360°の星空観察なども準備されていた。

2日目の6つのワークショップのうち、乳頭温泉郷内では、A休暇村、B鶴の湯、C黒湯の3コースが設定され、それ以外のワークショップ（D田沢湖、E駒ヶ岳、Fわらび座）も含めて、すべてのコースでブナの森での散策と少なくとも1つの温泉体験ができるように計画されていた。全国憧れ温泉地ランキングで2年連続1位の乳頭温泉郷には、鶴の湯、妙乃湯、黒湯温泉、蟹場温泉、孫六温泉、大釜温泉、休暇村乳頭温泉郷、といった個性豊かな温泉があり、湯桶を頭に載せたバス（湯めぐり号）も周遊している。湯めぐり帖でお得にたくさん温泉を巡ることもできるようである。

ブナの森で出会える森の仲間たちも写真で紹介されている。たくさん出てきてブナの保育園のようなブナの実生、歴史を感じる堂々とした大木、ヒメアオキ、ギンリョウソウ、ミズバショウなどの草花、秋田で竹の子といえバネマガリダケ、その他にセミ、オトシブミ、クマの爪痕、そして、落ち葉の上でカモフラージュしているカエルなどである。

山から下りると最大深度423.4mの日本一深い田沢湖が広がる。ここでは田沢湖の固有種であったクニマスが、絶滅するに至った経緯やもとの環境を取り戻すための取り組みを知り、人と自然との関係に目を向けてみることが予定されていた。花の百名山でもある標高1637mの秋田駒ヶ岳に8合目から登るコースもある。眼下には田沢湖を望むことができ、この時期に咲く花を観察しながら、山歩きが楽しめる。このほか地元根付いた演劇集団わらび座での役者体験も計画されていた。

さらに、エクスカッションでは、男鹿半島・大潟ジオパークにおいて、潮瀬崎のゴジラ岩、1400万年前の化石が見つかった鶴ノ崎海岸の球状コンクリーションなどについて、案内人の方からお話を聞く計画であった。

全国大会は中止になったが、秋田県シェアリングネイチャー協会のスタッフ

からは、現地の下見や準備をする中で、地元である秋田の本当の良さに気づいて喜びや財産を得たこと、そして秋田市や仙北市の関係者からの活動への理解と協力や支援、また開催に向けた2年間、フォローアップセミナー等でのシェアリングネイチャー東北ブロックの協力や助言、計画立案にあたり何度も秋田に足を運び一緒に考えてきた日本シェアリングネイチャー協会のスタッフ等に対する感謝への言及もあった。

日常において継続的に自然体験活動を実践することに加えて、様々な体験活動を実践している多様な全国の仲間たちと出会えることや参加者の立場にもなって自然体験ができる全国レベルの研究大会はとても貴重な時間である。

自然体験活動を安全に充実した内容で実践するためには、地域の人材と共に、全国の各地域における人材との協力や支援も大切になってくる。

4. 本学の「京女の森」並びに「京女 鳥部の森」における活動

本学の「京女の森」並びに「京女 鳥部の森」は、自然体験型環境教育を実践できる貴重な活動の場である。奥山に近い里山である「京女の森」と大学に隣接している「京女 鳥部の森」では、その自然度も活動の頻度も異なる。2020（令和2）年度は、新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、大学における前期授業は対面形式ではなく、オンライン授業に置き換えられた。しかし、後期になり対面授業も実施できるような状況への変化もあった。自然体験活動がほとんどできなかった2020（令和2）年度は、これまで実践してきた取り組みも踏まえながら地域の人材との連携について考察する。

京都市左京区大原尾越町に位置する「京女の森」は、本学のある東山七条から北約50kmに位置する標高が650～800m、広さは約24ヘクタールの水源涵養保安林で、1950年代後半の燃料革命以後、放置され天然更新しつつある旧薪炭林である。1990（平成2）年以來、学外からの専門家の協力を得ながら、本学の学生が参加する環境調査を実施してきた。

最初の5年間の調査では、毎月ほぼ2回、延べにして280名もの学生が参加

して総合的なフィールド調査を行った。その結果は、環境調査報告書『尾越のいのち』で報告している。この地域の5年間の気象観測や地質調査をはじめ、植生、菌類、昆虫、野鳥、両生・爬虫類、哺乳類等の総合的調査から、「京女の森」は極めて生物多様性が高いことが明らかとなった。さらに、5年間の調査後も引き続き自然体験や環境学習のフィールドとして活用している。この森の中には、ニノ谷尾根コース、ナメラ林道コース、荒谷コースの3つの観察コースが設定されている。各コースには、20m 間隔に細い杭、100m 毎には太い杭が打ってある。この杭番号を参考に、『尾越のいのち』にある季節毎の地図と照らし合わせることで、歩きながら実際にそこで目にする植物も分かるようになっていく。

京都市の所有林から入り登山道を30分も歩けば、尾根を境にして左側に天然林、右側には人工林を見ることができる。ニノ谷尾根コースにおいては、アカマツ、モミ、アセビ、ネジキ、ソヨゴ、タムシバなどの様々な樹種からなる天然林とスギやヒノキの人工林との比較観察も容易にできる。尾根道の足元のふかふか感を味わいながら歩くと野生のシカに食べられたリョウブの樹皮や回復しつつあるその傷痕も観察できる。ナメラ林道コースは、峰床山（京都府下2番目の標高970m）の山腹を削って建設された林道のコースで、道沿いの崖に層状チャートが見られる。露頭の観察が容易にできると共に、いろいろな意味で環境教育の実践の場としても活用できる。荒谷コースでは、まず谷筋に沿ってスギの植林地が続く。ここは、かつて薪炭利用された二次林（天然林）が広がっている。沢筋でミズナラ、カエデなどの谷筋を好む植物をはじめとして、野鳥、蝶、水棲昆虫、菌類など野生生物の生態の観察に適している。

自然体験学習では、どのコースでも、五感を使って、いのちの不思議に触れてもらい、感じてもらうようにしている。こうした具体的な実体験の積み重ねの中から、「自然生態系」を実感していくことが大切である。調査開始から30年の間には、四季の自然観察会に学生・教職員はもとより京都市のボーイスカウトや緑の少年団、自然関連のNPO団体あるいは附属小学校の育友会など様々

な団体も参加している。幅広い年齢層、多様な人材との自然の中での体験を通じた交流や連携は、自然体験活動や環境教育を広げ深めていく意味においても大切である。

1990（平成2）年の環境調査開始からこれまでの間には、2014（平成26）年度や2018（平成30）年度のように、集中豪雨や台風の影響で「京女の森」への道路が通行止めとなり、活動する機会に恵まれなかった年もあった。2020（令和2）年度は、対面授業も可能な状況になった後期の11月上旬に「京女の森」での活動を計画したが、悪天候と重なり中止せざるを得なかった。奥山に近い里山である「京女の森」は、大学から距離があり車での移動が必要なため、頻繁に行くことは難しいが、ダイナミックな自然体験が可能である。コロナ禍の収束後には、「京女の森」での自然体験活動を再開し、今後も継続的にフィールドとして活用していきたい。

一方、大学の東側に隣接している「京女 鳥部の森」は、2008（平成20）年9月に本学と林野庁近畿中国森林管理局が「遊々の森」協定を締結したことに始まる。それ以来、環境教育を推進するフィールドとして阿弥陀ヶ峯国有林（13ヘクタール）を「京女 鳥部の森」と名付けて活用している。この森は、豊国神社境内の常緑の森とつながり、四季の変化が楽しめる。

「京女 鳥部の森」は、シイやナラが優先する林、ヒノキやスギの植林、ソヨゴ・リョウブが優先する林の三態に大きく分けることができる。昔の里山であった雑木林とヒノキやスギを植林した人工林が混在しており、両者を比較しながら観察することが可能である。例年は春から初夏、秋、初冬にかけて、季節ごとに自然体験をしながらネイチャーゲームも実践している。また、ネイチャーゲーム課程認定校として、リーダー養成講座を開催する際には、大学構内でのネイチャーゲーム体験に加えて、より自然度の高い豊国神社境内や「京女 鳥部の森」においてもアクティビティを体験している。さらに、京都府シェアリングネイチャー協会の総会前には、ネイチャーゲームの指導員（リーダー）が集まって、豊国神社境内や「京女 鳥部の森」において、アクティビティを

実践したりしている。

2020（令和2）年度は対面での授業が可能となった後期に、「京女 鳥部の森」でネイチャーゲーム体験と共に、ナナカマド、ヤマザクラ、タマミズキの紅葉やコシアブラ、タカノツメの黄葉など秋の自然を観察することができた。しかし、例年3月末に開催するネイチャーゲームリーダー養成講座は、コロナ禍のため2019（平成31）年度に引き続き2020（令和2）年度も開催できなかった。また、毎年5月に開催される京都府シェアリングネイチャー協会の総会も2020（令和2）年度は、対面ではなく書面による決済へと変更された。そのため、総会前にネイチャーゲームの指導員（リーダー）が集まる機会もなく「京女 鳥部の森」での自然体験の交流もできなかった。コロナ禍の状況を見据えながら、「京女 鳥部の森」や「京女の森」での活動を継続的に実践することを大切にしたいと考えている。それと共に、コロナ禍の収束後には、これらの森での連携した活動も再開していきたい。

おわりに

2020（令和2）年度は、コロナ禍において上記のような状況が続いていた。各種の関連する団体や地域の会と連携し、感染症対策をとりながら、安全面を確保すると共に、安心できる場づくり、安心できる自然体験活動へ向けた準備や実践に継続的に取り組むことが大切である。これまで以上に、自然と触れ合うことの大切さや連携していくことの大切さを実感している。本学の「京女 鳥部の森」や「京女の森」での継続的な活動と共に、関連する全国の人々との繋がりや地域の人材との連携した活動により、子どもたちの感性を大切にする五感を使った自然体験型環境教育の再開を目指していきたい。

文献

中央教育審議会（2013）今後の青少年の体験活動の推進について（答申）平成25年1月21日

第18期（2019年度）ジュニア自然大学カリキュラム（本科）2019年活動テーマとね

らい 2019. 3. 16 資料

第19期 開講式進行シーンの流れ 4月25日(土) 2020. 3. 14 資料

ジョセフ・B・コーネル著、吉田正人・辻淑子・品田みづほ訳(2003)『ネイチャーゲーム1』改訂増補版 第3刷、日本ネイチャーゲーム協会

ジョセフ・コーネル著、吉田正人訳(2016)『空と大地が私に触れた』日本シェアリングネイチャー協会

ジョセフ・コーネル著、吉田正人・辻淑子訳(2013)『シェアリングネイチャーゲーム 自然のよるこびをわかちあおう』日本シェアリングネイチャー協会

閣議決定(2018)「環境保全活動、環境保全の意欲の増進及び環境教育並びに協働取組の推進に関する基本的な方針」平成30年6月26日

公益社団法人日本シェアリングネイチャー協会(2014)『公認ネイチャーゲーム指導員録 自然案内人2014年度版』日本シェアリングネイチャー協会

公益社団法人日本シェアリングネイチャー協会(2015)『ネイチャーゲーム指導員ハンドブック 第7版—理論編—』日本シェアリングネイチャー協会

京都府シェアリングネイチャー協会(2020)「京都かも川ネイチャーゲームの会2020年度活動予定のお知らせ」『京都府シェアリングネイチャー協会 会報ムクノキ通信』2020年度 春号

京都女子大学・京都女子大学短期大学部編(1995)『尾越のいのち—尾越山林環境調査報告書』京都女子学園

京都女子大学生命環境研究会(2011)『京女鳥部の森 散策マップ』京都女子大学生命環境研究会

宮野純次(2016)「自然体験型環境教育—身近な自然体験から行動へ—」能條歩編著『人と自然をつなぐ研究 ネイチャーゲーム大学講義録』公益社団法人日本シェアリングネイチャー協会、pp. 151-174

宮野純次(2017)「地域の自然を活用した自然体験と環境教育の取り組み(1)」『京都女子大学宗教・文化研究所研究紀要』第30号、pp. 49-60

宮野純次(2018)「地域の自然を活用した自然体験と環境教育の取り組み(2)」『京都女子大学宗教・文化研究所研究紀要』第31号、pp. 51-61

宮野純次(2019)「京都の自然を活かした自然体験と環境教育の推進(1)」『京都女子大学宗教・文化研究所研究紀要』第32号、pp. 37-49

宮野純次(2021)「京都の自然を活かした自然体験と環境教育の推進(2)」『京都女子大学宗教・文化研究所研究紀要』第34号、pp. 101-118

宮野純次・高桑進(2007)「体験型環境教育プログラムの調査と研究(1)」『京都女子大学宗教・文化研究所研究紀要』第21号、pp. 63-72

宮野純次・高桑進(2008)「体験型環境教育プログラムの調査と研究(2)」『京都女

- 子大学宗教・文化研究所研究紀要』第22号、pp. 1-15
- 文部科学省（2002）「第1章 体験活動の充実の基本的な考え方」『1. 体験活動事例集—豊かな体験活動の推進のために—』
- 文部科学省（2008）「1.2. 体験活動を効果的に行うポイント」『体験活動事例集—体験のススメ— [平成17、18年度 豊かな体験活動推進事業より]』
- 青少年の体験活動の推進方策に関する検討委員会（2016）「青少年の体験活動の推進方策に関する検討委員会」における論点のまとめ 平成28年11月
- 社団法人日本ネイチャーゲーム協会編（2004）『ネイチャーゲーム指導員ハンドブック 第6版—アクティビティ編—』ネイチャーゲーム研究所
- 社団法人日本ネイチャーゲーム協会編（2005）『ネイチャーゲーム指導員ハンドブック 第6版—理論編—』ネイチャーゲーム研究所
- 全国ネイチャーゲーム研究大会 from 神奈川 秋田 TIME ～ブナの森に抱かれて（秋田県シェアリングネイチャー協会）〈参加者専用ページ〉
<http://site.wepage.com/kanagawa-naturegame/page5>（参照2021-06-05）
- 全国ネイチャーゲーム研究大会 in 秋田 2020「ブナの森に抱かれて～ココロもカラダも“森”呼吸～」実施計画
<https://www.naturegame.or.jp/>（参照2020-10-30）

<キーワード>

自然体験活動の実践 人々との連携や繋がり
体験型環境教育 ネイチャーゲーム